
野口君観察日記。題名は変え・・・るのかな？。

inisie

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野口君観察日記。題名は変え……るのかな？。

【Nコード】

N9645X

【作者名】

innisie

【あらすじ】

野口君は主人公ではありません。観察対象です。ペットです。異世界ものです。

そんな所です。ヒロインが走り回る不思議なお話です。では皆様私の日記をご覧ください。

1話：副題を考えるのがめんどくさい。（前書き）

第一話というより零話に近いです。
登場人物の自己紹介のお話ですね。

1話：副題を考えるのがめんどくさい。

夢を見た

幼馴染を刺し殺す夢を見た

胸から血が飛び出し顔にかかる

「わりい」

「いや、いいよ」

それだけで十分だった。

・・・なんだ今日の夢は

どこの厨二病だ！と叫びたくなる衝動を抑えベットから起きカーテンを開く。

陽射しが眩しい、今日は晴天のようだな。

ああ、いい朝だ、あんな血生臭い夢を見たとは思えない。

顔を時計へ向ける。

・・・ああ、いい朝だ・・・時計が9時という始業時刻を過ぎていなければ！

学校へ到着し先生に報告し今月10回目の遅刻ということで、少々
の説教を受け教室へ行く。

ふう、と一息、そこに声をかけられた。

幼馴染の野口君じゃないか。

「よう、おはよう？」

何故に疑問系といったところで時計を見る10時を過ぎていた。

疑問系も納得だ。

「今月何回目の遅刻だ？2桁のつたか？」

おお良く分かった、野口君は私の遅刻の回数まで暇だからといって数えているのか。

ストーカーなのか？おお怖い怖い。

「馬鹿やろう！心配してる幼馴染になんて態度だよ。まあ遅刻も程ほどにしとけよ？」

分かっている。確か150回遅刻すると1ヶ月分の欠席と同じだから、ほぼ進学は出来ないだろう？推薦ももらえなくなりそうだ。

「そういう事を言ってるじゃねーけどなあ・・・まあそこらへんはお前は分かかってやってんだろうからいいんだがな」

二人で手を繋ぎながら教室へ行く。

「何故手をつなぐ！いやいやいやいや離せ！このまま教室に行ったら玄関口まで迎えにいった変な奴だと思われるだろ！生徒会長の俺を変人に仕立て上げる気か！」

うるさいと一蹴。元々君は変人だ。これ以上に変人になれるわけがない。むしろ変人に失礼だ。変人に土下座をしな。

「・・・」

口をぱくぱくさせている。ふむ面白い顔だ。魚の真似か。私もしてみよう、ぱくぱく

「お前・・・後で覚えてろよ・・・」

覚えておくわけが無い。そこまで遊んだ所で手を離し先に行く野口君。

ああ説明がまだだったな自己紹介だ。

18歳 185cm 体重75kg 髪は黒のショート ツンツン

頭だな。

学力テスト校内1位

スポーツにおいては陸上で県大会3位

囲碁部においては団体戦県2位

全国弁論大会においては理事長賞だったかな？

顔はまあまあ整ってる異性にはそこそこもてるだろう

それでいて生徒会長をやっているという！

なんとも忙しい野口^{のぐち} 克也^{かつや}君！

私にはまったく真似できないよと頷いていると教室に到着した。
何故か身震いした。どこぞの見えない世界からツツコミが来た気がした。

気のせいだろう。うん気のせいだろう。

教室のドアを開く。皆の目が私に向く友人達に挨拶をし自分の席につく。

そこへもう一人の幼馴染の顔があった。

「おはよう？今日はどうしたの？」

寝坊した。絢子さん今日も可愛いね。絶世の美女のようだね。きつと絢子さんを見たら卑弥呼だろうとクレオパトラだろうとベアトリ―チェだろうと逃げ出すだろうね。

「ありがとう？けど3大美人をあげるんだったら卑弥呼じゃなくて楊貴妃だし、もう一人はちよつと良く分からないよ？」

なんと！卑弥呼ではなかったのか。まあなんでもいいじゃないか。

ああ後もう一人は絢子さんは一生関わらないで欲しいジャンルかな。気にしないで。

と、チャイムになる。

「あつ後でゆつくりお話しようねー。」

若干間延びた声で去って行く絢子さん。さて後で授業の準備だ。あれ？鞆の中身が昨日のままだった。まあいいか。どうせ私は学校にいる間ほぼ、一つの科目しか勉強しないのだから。

さてここで自己紹介といこうか

校内美少女ランキング3位

もうここで分かったと思うけれども小林いばやし 絢子あやこさんのことだ。

眉目秀麗、頭脳明晰、スポーツでも体育程度にならソツなくこなし、誰にでも優しい。と3

拍子どころか4拍子揃ってしまった日本3大美女の一人だろう。

身長は160cmぐらい？ 体重は45kg、48kgぐらいだろう。

髪はロングの金髪な訳はなくショートの薄茶色といったところか。

そろそろこれは自己紹介ではなく、他人紹介と言った方がいいのだろう。

2時限目の授業が始まる。数学のようだ。ふむふむ今日は小テストか。

15分で終わらせる。さて野口君のほうはと、前を見てみる、寝てる。生徒会長さん。やっぱり貴方は変人です。先生の目の前の席で寝れるその度胸。私にはとても真似出来ません。

先生の苦笑した顔を見てみなさい。

生徒会長で学年一位それに加えて普段は品行方正な貴方がテストが終わったといって寝てても注意できないでしょうが。

しょうがないですね、ここは私が一肌脱いであげますね。先生、後でパンを奢ってくれてもいいんですよ？

ガタツと席を立つ。先生にテストを手渡す。周りを見回す。全員がこちらを見てる。

ニヤニヤしてる人と頭に？をつけている人の二通りかな。

野口君に近づく、髪がささりそうだ。バリカンを持ってきてこの草畑を刈ってやろうか。

と耳元にふうーーーーと息を吹きかける。

ガバツと起き上がる。

「な、な、な、なにしよ」

某野球漫画のように言う カツちゃん！南を甲子園につれてって！

「誰がカツちゃんか！南！この野郎！」
教室内は大爆笑の渦につつまれた。

さて、ここで自己紹介をしよう。

久坂^{くさか} 南^{みなみ}私の名前だ。

身長は155cm 体重は40kgぐらいなはずだ。最近計つてないからなんとも言えないが。

髪は漆黒といって良いほどの黒 長さは腰元ぐらいまではあるだろう。

スポーツは普通 クラスで浮く程下手でもなく

ピアノが少し出来る。

勉強に関してはそこそこの学年で30番目ぐらいといったところか？

趣味は人間観察というか野口君観察。

部活は囲碁部の部長をしている！部員3名だ！

絢子さん程ではないがそこそこ顔は整っていると思う。

あえて言うなら釣り目がちなのが傷といったところか？

私の特徴を言うならばそんな所だろうか？

…野口君の観察は面白いな。

皆にも体験してほしいところだが、この後の体験談を聞いた後でも体験したいと思うならばだけどな。

1話：副題を考えるのがめんどくさい。（後書き）

この度は見て頂きありがとうございます。

まあ堅苦しい文はどうでもいいとして、み、みてくれてありがとうございます！

ではでは失礼致しました。

2話：異世界ものじゃなくて学園物？（前書き）

第2話です。

学校パート終了です。

さて、勝手に動いていくキャラクター達に翻弄されながら頑張っていると思います。

2話：異世界ものじゃなくて学園物？

ふむ、2時限目の数学が平和に終わった。

野口君を見てみると机に顔を乗せて寝た振りをしているようだ。
この後のことを考えると憂鬱なのだろう。

分かる。今の私がそうだ。

「ねえねえ！野口君とはどういう関係なの！？」

クラスの女生徒が3人、私の机の前に立っている。

ああこの子達は初めて私達と同じクラスになった子か。

他にも何人かこちらを窺っているな。

彼氏だよと言。将来を誓いあっているんだ。

歓声が巻き起こる。

「南！てめえ何いつてやがる！ただの幼馴染だろうが！」

野口君寝たふりは終わったのかい？

幼馴染だね。学校が一緒になったのは高校生からだ。

「あーあー学校が一緒じゃないのに幼馴染なのは学区が違うからだ。
南の家と俺の家隣なんだが道路を隔てて中学と小学の学区が違うんだ。」

その通り歩いて3分もかからないのにも関わらず学校が違う。まあ私達の愛の前ではそんな道路なぞ障害にもならないがな。

「うるせえ！俺が彼女居ないのは99%お前のせいだからな！」

「けど、二人共高校では一緒なんだね。一緒にいたいから高校一緒にしたの？」

ぴくつと野口君が反応する。その反応は微妙だね。きちんと反論し

ないとまた誤解を招くよ野口君。

そうなんだ。私がこの高校を選んだら野口君と一緒に居たいと言いだしてね。

私としては断る理由がまったくないから了解したのだが。

「嘘をつけ！嘘を！近くの高校選んだらお前がいて、理由を聞いたらまったく一緒だったじゃねえか！」

そうなんだ。本当は色恋沙汰はまったくないんだ。けれども野口君は私を愛してくれているんだ。少し前から廃れてきてるツンデレというやつかな。困った困った。

「…」

また口をばくばくとさせている。

野口君は魚の真似が得意なんだね。私も真似をしよう ばくばく

「もういい…疲れた。」

まあそんな関係なんだ。ご理解出来たかな？婦女子諸君。

「う、うん分かった。野口君…頑張つてね！応援してるよ！」

何をだらうとツツコミたくはなったが応援してくれているよ野口君。

3時限目の科学が始まる。

そこで絢子さんのほうを向く。ぷくーとふくれた後、ため息をしているのが見えた。

うん。とても可愛いよ絢子さん。どこをどう見ても絶世の美女だ。

よそ見をしていると先生が入ってくる。部活の顧問だ。

「久坂…今日は遅刻してないか？」

名指しでのご指名。はいしていません。科学には間に合いました。

「それは遅刻したっていうんだ。はあ…もう少し遅刻は無くせ。」

もう少し心労を減らしてあげたほうがいいだろう。今年で定年退職というのに私という問題児を抱えていては休むに休めないのだろう。さて科学に関しては、あまり問題ないので先ほどの夢に関して考えていこう。

まず、私には予知夢と言われる能力がある。範囲としては、かなり限定されている。私の身の周りに起こる事に加えて寝ている間の夢だけではなく、突然眩暈がして数分後の光景が頭に思い浮かぶというパターンもある。

今回は前者のようだ。

まあ・・・予知夢程大げさではないか。外れる場合もあるのだから突拍子も無い場合は100%今の所外れている。後、私が関わっていないことを見た場合も100%だな。例えばだがクラスメイト全員がゾンビになる夢や、野口君に彼女が出来たとかな。だが私自身が夢に出て、かつハッキリ覚えている。喋った言葉まで覚えている。この場合は当たる可能性がかなり高い。

では、何故私が野口君を刺す夢を見たのか。あまりにも突拍子も無い夢は当たらないのか。けれども、もしかしたら本当に野口君を刺してしまう場面でもあるというのか。

…ありえないな。野口君は変人だが品行方正であり、悪事というのを働く場面が想像つかない。

ん？私が野口君をあまりに嫌いになって刺す可能性か？

ありえないな。私が嫌いになったら刺すだけでは済まないだろう。

前後の会話も気になる所だが、思い出せるのは野口君が謝罪をし、私とその謝罪を受け取っている。その場面しか夢の記憶がない。

ふむ…まあいいだろう。もし正夢なのならば逆夢にしてしまえばいいのだから。

キスでもすれば大丈夫だろう。

…ん？野口君の様子が変だな。頭がふらふらしてる。眠いのか？先程のアレでは目が覚めなかったのか？

いや、おかしい10年以上野口君を見てきた私だから言えるあの様子はおかしい。

倒れてもおかしくなさそうだな。すぐに動けるように…

…背中が光った？いや…野口君が光ってるように見…私は走り出した。

間に合ってくれ。

野口君が消えそうだ。

体の半分が消えている。

指が消えるその一瞬。

私の中指が引つ掛かった。

ふう… 一体君は何度面白い場面を見せてくれるのかな。

金色に輝きだしたときは某サイヤ人にでもなるのかと思ったよ。

薄れる思考の中で、そんな事を考えていた。

2話：異世界ものじゃなくて学園物？（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

最後まで読んでなくてもクリックしてくれてありがとうございます。

とりあえず2話終了です。

3話目からは異世界編ですね。

どうなるかは予想がつきません。

キャラクターが勝手に続きをやってくれるでしょう。

ではまた。

3話：異世界もの。（前書き）

本番開始。

3話：異世界もの。

ん・・・硬い・・・床で寝てるぐらいに硬い。

朝が弱い私がこんなにすつきりと起きれるのは珍しい。

・・・喉が渴いたな。

起きて水を飲みにいこう。

そう思った瞬間ハツとする。

野口君はどうした？

周りを見渡す、どこにもいない。

・・・ここはどこだ。森の中のようだが手入れがされている。
森の中の広場といったところか。

ここまで綺麗に円形に広場を作る公園でもあるのか。

ガサッ

音がした。

野口君か？それとも他の人か？

警戒度を上げ音のした方向を見る。

そこから出てきたのは金色の髪をした見た目20歳前後のお兄さんだ。

「君は誰だ？」と日本語で話しかけてきた。

言葉は通じるようで安心した。ここは日本のどこかのようだ。

私は自己紹介と友人を探していることを説明した。

「君のような黒髪で短髪で身長は私より少し高いと」
考えてる素振りが似合う人だと思った。

「ああ申し訳ない。淑女の前で自己紹介もしないとは失礼した。
私の名前はエル・シュタイン この家を警備しているんだ。」

警備員？警備員がいる家とは・・・ここは公園ではなく家の一角なのか。

「ああ、こんな所で話すのも失礼だな。本宅へは連れていけないが
私達が寝泊りする所へ案内しよう。
そこなら座れる所も飲み物も用意できる。」
すごく嬉しかった。喉が渴いていたから水をもらえると嬉しい

警備員の詰め所へ向かう途中

「珍しいね」と一言
なにがですか？と聞き返すと

「その髪の色だよ。私は23年間生きてきて髪が黒い人間は初めて
みた。どこか遠い国の人なのかい？」

・・・その言葉が本当だとしたら、ここは日本ではないことが確定
する。

もしかしたら言葉のアヤで私みたいな綺麗な黒髪の人は見た時がな
いというナンパの台詞なのだろうか？・・・ないかな。
曖昧な返事を返しておく。

応接室というかソファ―室のような部屋へ通された。

「飲み物は何がいい？」

水かコーヒーがいいです。

「すまん。コーヒーとはなんだ？」

・・・水を下さい。

コーヒーを知らない世界・・・あり得るの・・・？自分の中で自問自答を繰り返す。

もしかしたら、ここは未開の秘境みたいな所なのか・・・？

「ミナミ・・・ミナミ！」

ハッとした呼ばれていたようだ。

「ミナミはこれからどうするんだい？1日ぐらいならここに泊めてあげないこともないけれど。友達を探すなら一番近くの町まで送っていくよ？」

私の中で警報が鳴っている。

一番近くの街までどれぐらいかかるのか聞いた

「2日はかかるかな？それがどうしたんだい？」

・・・99%確定した。ここは日本ではなく地球ではない可能性が高い。

もし地球だったとしたら孤島のと真ん中か、アフリカ等の奥地に近いだろう。

けれども、こんな大きなお屋敷がサバンナ等のど真ん中に立っている訳がないから後者は却下。

前者の可能性を信じて、移動方法を聞いてみる。

「馬を使うつもりだよ？ミナミは乗れるかい？」

これで島という線もほぼ消えた。

・・・野口君・・・君はどこまで特別なんだい？
それが良い所なんだけれどもね。

「ああミナミ。僕は主の所へ報告へ行ってくる。君の事も少し話をしなければいけないだろうから時間がかかりそうだ。ここでゆっくりとしているといいよ。」

と、言い席を立つエル。

ちょうどいいな、私も考えを纏めたい所だ。

さてここは、私がいた世界ではない可能性が高い。

第一に野口君に触れた後、私は庭という名の広場で寝ていた。

第二に移動方法が馬。これはない。どんな遊牧民なのだろうか。

もしかしたらモンゴル等では？という可能性もなくはないが、どうみてもエルという人はアジア系ではない。

まず、私は何をすればいい？

野口君を捜す。日本に帰る。この二つが最たるもの。

お金はどうするか・・・胸ポケットにいれた1000円のみ。

持ち物。鞆は無し。ボールペンが1本。電池が3本の圏外の携帯電話。

服は制服。スカート。ブレザー。ブレザーの下に着た黒のセーター。

・・・詰んでるような気がする。

野口君・・・恨みたくなるよ・・・絢子さんはどうしてるかな。

あの笑顔が見られないのは私の精神的疲労度が20%増しになりそうだ。

まあ悲觀的に考えてもしょうがない。こういう異世界の小説とかではいきなり山賊やら盗賊とかに会って奴隷になるとかもある。そう考えたなら私はましなほう・・・とか思えるわけないだろう！

絶対見つけて、抱きしめて引っぱたいてやる・・・。

報酬は君の体だ、野口君。

精々体を洗って待っていてくれたまえ。

・・・おかしいな。あれから2時間がたった。説明に時間がかかっているのか？

クラツと私の体がぶれた。

眩暈が久々だな。

私が縛られている姿が見えた。

・・・野口君は緊縛の趣味でも出来たのか・・・と思いたいがまず違うだろう。

私は動揺でもしていたのか。どんなにみんなに落ち着いていると言われているにも私も人間だからな。

おかしい点があったな、何故エルはあれだけ親切なのだ。

私にそれだけのメリットがあるか？いや、ないな。まったくの初対面の人間をここまで歓待してくれる。話を聞いてくれるのは有り難いが、ここが私の居た日本とは違うという事を踏まえるとあり得ないな。

・・・ここから出た方がいいか。それともエルは本当に親切で初めて会った人にも関わらず助けてくれるのか。

後者だった場合は有り難く街まで送ってもらおう。けれども前者だ

った場合と先程の眩暈。
どうするか。

・・・野口君。君ならどうする？皆を引っ張ってきた君なら・・・

3話：異世界もの。（後書き）

第3話の終了。異世界編開始です。
次からは野口君探しの旅へ。いけるのか・・・？

4話：他人のフラグプレイカ―（前書き）

異世界編第2話。

4話：他人のフラグプレイカ―

野口君・・・君ならどうするかな？

・・・いや、君は頭はいいが単純な所があるからな。
私が小学生の時からいつも抑えてきたじゃないか。

なら、いつもの私でいこう。

さて、どこから逃げるべきか。

取りあえず、ドアからか。誰がいるか？いると予想するべきだろう。
保留。

窓、開くがこれは無理だな。私がスレンダーとは言え空気窓から出るのは無理だろう。胸か肩が引っ掛かるだろう。野口君が聞いたら引っ掛かる程ミナミに胸はねーよとか言われそうだな。フッフ。

壁、無理だな。私には念を使うことはできないから壁を壊すのは不可能だな。

上、壁があるだけか。

ん？照明がない？照明は横壁に掛っているのか、照明をしてみる。
外せるようだな。ただの球体？電池はどこから入れるのだろう？まあ貰っておこう。鞆が欲しい所だな。

とりあえずドアでいこう。どうやって外に出るかだな。
内側からノックをする。誰かいたら返事をするだろう。

「あーどうしましたか？」返事があった。
ふむ、お手洗いにいきたいと伝える。

驚いた。緑の髪だ。ピッコロさんもびっくりだな。

お手洗いに案内される。こちらを振り向いた瞬間、腕を振り抜いた。

ふむ。綺麗に顎にはいったようで安心した。

1時間は起きないだろう。出来れば護身用のものが欲しいのだが、ナイフが入ったポーチがあるな。

ここにライトを入れて腰につけておこう。

慎重に外に出る。移動手段が欲しい所だな。後できればスカート以外の服が欲しい。

取りあえずスカートは折ってある部分を伸ばしておこう。

野口君が居ないのならばミニの意味はないだろう。

警備の詰め所という割りには人数がいなかったな。本宅と庭の警備中といったところか。

取りあえず街道方向へ向かおう。

・・・ふむ土の地面。明らかにタイヤではない車輪のものがまっすぐ向かってるな。

街はこちらか。馬で2日となると大きな街へは4日はかかるとみていいな。

途中に小さな村があることを祈ろう。

街道沿いの森の中を歩く。これは・・・きついな。多分だが追手は居る可能性がある。そのまま街道を歩く気にはならない。

水が欲しい所だ。飲み物か食べ物そろそろ手に入れないとな。火

があれば草木は食べれるものがありそうだが。ライターはないし。FFやDQよろしく手をかざして呪文を唱えれば火が出ればありがたいのだがな。

目の前が炎上した。驚いた。これはどうしたとか。メラやファイヤというのは存在したのか。

この世界はあり得ないな。だから異世界か。MPはどこに表示されるんだ。

まあいい。なんでもいい。火を手に入れたのだから。

半日ばかり歩いた所に、小さな村が街道沿いにあった。

さすがに私もカロリー補給がしたい。どんなに低コストで動く私の体でも1日食べないで歩き通すのは無理だ。それに会話がしたい。野口君をいじりたい。ふむ、野口君は私にとって必要な栄養素だったのかもしれない。それに気づけただけでもこの1日は有意義だっただろう。

村の様子を見る。人が数人・・・外を歩いているな。強盗は出来ればしたくないのだが・・・最悪背に腹は変えられないか。

・・・私は今、村で食事をしている。

「お嬢ちゃん！すごいな！どれだけ食べるんだ。」

すごい大きな声で笑ってる。少し恥ずかしいな。お腹が空いていたとはいえ食べ過ぎたか。

この人は村の宿屋を営んでいるサースさんというらしい。

「いや、さつきは助かったよ。あいつは村の作物を潰す、柵は壊す
と来るたびに村が荒らされてな。」

ごめんなさい、私も作物を奪おうとしていました。

「さつきのは、なんだったんだい？掌から火の玉が飛び出してきて
たが？」

私の国の国民的英雄の勇者から教えてもらったんです。

「あつはっは！そりゃいいな。うちの国だけではなくて、他の国に
も勇者がいるのか。」

数十分前・・・

私は村の脇で様子を窺っていたところ、2mはあろう猪が村の畑に
突進してきていた。

見ているだけにしようと思ったのだが、村人達が鍬を構えて立つて
いる所を見ると害を与えるものと分かり、その時には火を出して
いていたのだ。

1回でその猪は燃え上がり、そのまま横に倒れてしまった。

これは、この魔法は強いのだろうか？それとも猪が弱いのだろうか
？判別しかねるところではある。

ん？先程の会話に変な所がなかった？勇者？本当に存在するのかそ
んな人間が。

「今回の勇者は強いみたいだぜ。大柄で髪の色はお嬢ちゃんみたい
な黒髪、大柄な割に足が速くてモンスターなんかじゃ速さでついて
いけないみたいだな。」

・・・なんだろう。その人物にはすごい心当たりがあるのだけでも、そのような特徴なら他にも多くいるだろう？

というかモンスターがいるんですか。本当にDQとかFFの世界観ですね。

私はあまりゲームをしないんですけれども、分かりやすくて助かります。

「ああ確か、ここに配布された紙があつたな。国から配布されたやつ。母ちゃんー！どこへやったっけー？」

そこには、こう書いてあつた。

新しい勇者が我が国。イスターナ皇国に誕生した。

名は カツヤ ノグチ

足が速く、頭も良く、魔法も使える。

我が国は、これよりモンスターを退治し、この国に永遠の平和をもたらそう！

とまあ長々と書いてあつたのを略すと、こんな感じ。

・・・野口君、君は本当に本当に面白いですね。

段々と最初に見た夢の内容が本当になつていくようですよ。

大局には逆らえないのでしょうか・・・？

いや、愛の前には神様だろうと神龍だろうと、全て、何も関係ないですよ。

私は野口君を抱きしめて、殴って日本に連れ帰るだけです。

楽しみです。私がこんな苦勞をしている中、貴方はどんどんフラグを立てていそうです。

私がいる限り、そのフラグをバキバキにたたき折って差し上げましよう。

4話：他人のフラゲプレイカ―（後書き）

第4話終了。

5話・回想という名の妄想。(前書き)

ん・・・？

前書き？

いらなんでしょう？
いる？

・・・よろしくお願いします。

5話：回想という名の妄想。

ふう・・・と一息。

夜になったな。1日で色々なことが起きすぎだ。

野口君に触ったら異世界らしき所へ。

起きたら人の家の庭で寝てて。

その家の警備員を殴って。

逃げ出して。

村へ行く途中に火を出して。

猪を倒して。

今は、体を拭いていると。

どうして、こうなったんだ。

普段ならば、野口君の事を考えながら、1時間はお風呂に入っている時間か。

浴槽とは言わないでも、せめてシャワーが欲しい所だ。

まあ体が洗えるだけでも良しとするべきか・・・。

野口君と出会う前の私なら、こんなに長くお風呂には入らなかったのだから。

髪を布で拭っていると、思い出す。

小学生のときのことを、あの時の私は髪は短かったな。

男子に負けず劣らずの喧嘩をして、口では負けた時はなかったな。

フッフ。

野口君もそういえば、いつも私に口で負けて泣きそうになっていたな。

あの頃は可愛かった。ああ違った。今も可愛いな。

「おい、久坂！」

呼ばれて振り向く。昨日、あれだけ負けられておいてまた来たのか。

「今日はかけっこで勝負だ！」

ふむ、良いだろう。ここからその木まででどうだい？

「久坂。今日こそお前を負けす！泣くまで負けさせてやる！」

良いだろういつでもいいぞ。

「ドン！」

二人で走り出す。トップスピードにのった。今日は負ける気がしない。

ゴールだね。野口君。今日も私の勝ちのようだよ？君は何度負ければ気がすむんだい？さて、私は宿題をするから家に帰るね。

「ぐぐぐ・・・じゃあ宿題をどっちが先に終わらせるか勝負だ！」

良いだろう。じゃあ私の家へいこうか。

「分かった。ランドセル置いたらそっちへ行く。」

お母さん。今日も野口君が来るから来たら私の部屋へ通して。

「ふふ、今日もなの？。仲がいいのね。ジュース用意しておくから来たらもっていくわね。」

「ただいま！」

ここは君の家ではないのだから。それにしても大きな声だ。

「久坂ー！今日は俺のほうは算数のドリルだ！」

私のほうは漢字の書き取りだな。

じゃあ始めようか。

二人で黙々と宿題を進める。二人共無言だ。

「うーん……。あ……。えーっと。」

うるさい。無言ではなかった。野口君、君は喋らないと勉強ができないのかい？

「いいじゃねーか！これくらい喋った内にはいらないだろ？……ん？」

終わりだね。私は終わったよ。

「……。くそつ。また負けかよ！」

いいじゃないか。算数なら私が見てあげれるよ？隣に座ってもいいかい？

「あ、ああ……。いいけど……。」

ん？どうしたんだい？

「なんでもねーよ！」

うるさい。

「……。」

無言になった。

「うーん……。」

ここはだね。この式を使ってだね。

その時、ノックがした。

お母さんか、カフェオレとオレンジジュースだね。

いつも通りだ。

「少し休憩したらどう？ずっと勉強するのも体の毒よ。」

そうだね。お母さん。

野口君、少し休憩にしよう。

カフェオレを私の前にオレンジジュースを野口君の前に。

「久坂ーなん・・・」

南だ、野口君。

「み・・・、それ名前だろ？」

ああそうだね。名前で呼んで欲しいんだ。

「嫌だね。まあ俺が勝負に勝つたら呼んでやってもいいかな。俺とお前はライバルだろ？そういうものは名前で呼び合わないんだよ！」
そうなのか。なら仕方ないか。では一生私は名前を呼ばれないな。

「なんで俺が一生負けてる前提なんだよ！！見てろよ！絶対にお前を負かしてやる！」

それはいいのだが、さっきは何を言おうとしたんだい？

「ああ・・・久坂は、なんでカフェオレなんて苦いの飲んでんだ？
美味しいのか？それとも大人ぶってるのか！？」
うるさい。

ああ無言になられては困る。美味しいよ。カフェオレはそんなに苦くないからね。飲んでみるかい？

「・・・う、ん・・・分かった飲む。」

なんで野口君は、そんなに顔が赤くなっているのかな？

「うるせえ！赤くななんてねえよ！」

うるさい。

「・・・」

飲んでいるようだ。

「にげえ！超にげえ！ウルトラにげえ！！」
うるさい。

「・・・」

「・・・こんな苦いもの良く飲めるな。よしっ！俺も飲めるようにする！おばさーん！俺も今度からかふえおれをいれてくれー！」

「良いわよ。けど無理しないでね。」

笑顔で話すお母さん。

雨が降る日だった。

お母さんのお葬式だった。

「トラックに挟まれたんだってね。ほとんど見る影もなかった」

「しつ。子供の近くですよ。」

「あつごめんなさい。」

そんな声が聞こえてきた。

私は黒い服を着ていた。お父さんは忙しそうだった。

庭にいこう。少し落ち着こう。

野口君が雨が降る庭に立っていた。泣いていたようだ。

「ぐすつ・・・あ・・・久坂。」

きずいたようだ。目が赤い。

やあ野口君、今日は来てくれてありがとう。

お母さんも野口君の事が好きだったからね。

「あ、ああ久坂は落ち着いているんだな。もつと・・・」

そうだね。動揺はしてると思うけど、思ったよりは・・・といった所かな。

「・・・なあ久坂。」

なんだい？

抱きしめられた。なんでだろう・・・？

「・・・南。落ち着いた振りだろ？俺達これでも5年も一緒にいるんだぜ？」

名前では呼ばないんじゃないかなかったのかい？ライバルはなんとやらじやなかったのかい？

「お前も良くそんなの覚えてるな。」

笑っている。なんだか悲しそうな笑顔だった。

「南・・・俺、頑張るよ。」

何をだい？

「なんでもだ。」

そうか。

「ああ・・・南が頼れるぐらいの人になるよ。」

ああ・・・分かった。

その日は庭の見える部屋で野口君の膝枕で寝てしまったようだ。

・・・その時からだったかな。髪を伸ばし出したのは、7年か。伸びる訳だ。

腰まで伸ばすつもりは無かったのだから。

野口君。君は今何をしているのかな。私が頼れる人なんだろう？
私がそっちに行くまでにある程度は終わらせておいてくれると助かるよ。

窓の外を見ながらそんな事を思ってしまった。

5話・回想という名の妄想。(後書き)

第5話終了。

小学生時の回想。

6話・緊縛？なにそれ美味しいの？（前書き）

猫耳にゃーん。

6 話：緊縛？なにそれ美味しいの？

目が覚めた。まだ暗い。

何故だ。私はこんなに早く起きる習慣は無い。

遅刻の常習犯の私が何故こんなに早くに起きなければならない。

音がする。

ガタンガタンと、宿屋の下の階から大きな物音がする。

なんだろう？と目を擦りながらドアを開ける。

「お嬢ちゃん！！逃げろ！！！！」
うるさい。

周りを見渡す。

仰々しいお出迎えですね。

兜を被り、鎧が指先、爪先まで・・・と。フルプレートというのですか。

サースさんの方を見ると、縛られているようだ。

良かった。少しは信用したのに売られていたとしたら最悪だった。

村の中の誰かか。いや、売らなかつたとしても、こんな鉄の塊みたいなのに脅されたら喋ってしまうだろう。

サースさんに謝罪する。そしてお礼をする。

「お前が、ミナミ・クサカか？」

はいそうです。違うといっても信じないのでしょう？

奥の人に尋ねると、兜を外し答えてくれる。

「そうだな。俺がいるからな。」

エル・・・なんとかさんだ。

「エル・シユタインだ。覚えてもらわなくて結構だがな。」

で、どうするんですか？分かっていますけれども。

「盗難と暴行の罪だな。我が主の所へ来てもらおう。」

警察とかは無いのだろうか？その罪はどうやって償えばいいのですか？返せば盗難は無くなりますか？

「そんな訳はないだろう。まあその話は主の所ですればいいだろう。お前からこいつを縛り上げる。」

少し待ってもらえますか？着替えがしたいのですが。

「ハッ！そんなものさせるわけがないだろう。その服に何が隠されているのかも分からないのにな！」

名前も分からない人がってピッコロさんですか。緑色の前髪がちよっと兜から出てた。

パジャマに緊縛ですか。変態ですね。超変態いや野口君風にいうならウルトラ変態というやつでしょうか。野口君が聞いたら、すごい否定をされそうですね。

「何を笑っているんだか知らんが拘束させてもらおう。」

火を出してもいいのだろうか・・・サースさんの家が多分無くなる。この火は燃やし尽くすまで消える事がないようだった。燃え広がる事は無いみたいだが。

後ろ手に縄を掛けられる。痛い。縄で縛られた事など人生で初めてだ。初めては野口君が良かった・・・いや、ない。縛るほうが良い。

足も縛られる。どうやって歩けと。思ってたなら、担がれた。荷物か。

馬車まで担がれる。途中でサースさんや村の人に謝っておく。

馬車の中に投げ込まれた。出来れば荷物も・・・と思ってたら服が入ったと思う袋も投げられた。

ポーチも・・・と思ってもさすがにナイフは返って来なかった。しようがない。あれは元々私のものじゃない。

ガタガタ揺れる。うん痛い。動けない。ゴロゴロ転がるくらいしか出来ない。

さて、眩暈の通りになってしまった。けれども眩暈のときは制服だったはずだ。未来は変わったはず、けれども同じ結果と。
なんだったかこれは。タイム・・・タイム・・・なんでもいいか。

確か歩いて半日ぐらいだったから馬車としても3〜4時間はかかるだろう。

眠たい。寝ていいかな・・・頭が回らない。いや、目が覚めきるまで1時間はかかる。寝ないほうがいいかな。

エルさんが馬車を操ってるみたいだ。すごい。馬なんて乗った時がない私からしたらどうやったら馬車が引けるような馬が操れるのか分からない。

「ミナミ。」

話しかけられた。返事をする。

「何故、逃げた？」

説明が難しいです。

「ふん、まあいい。主がお前を呼んでいるから連れてこいと言って

いる。俺達はその命令に従うだけだ。」

独り言ですか？独り言はモテなくなるといいますよ。

「お前に言っているんだ。まあ罪に関しては気にしないでいいそう
だ。そんなものはどうでもいいと言っていたからな。」

では、縄を外してもらえますか？胸が板に直接当たって痛いんです。
「上を向けばいいだろう？ああ上を向くと腕が痛いのか。我慢しろ。
まあ痛くなる胸もそんなに無いだろう？もし、ここで逃げられでも
したら俺達は職を失うだけで済まない可能性がある。」
うるさい。

困りましたね。逃げたらエルさん達まで処分される可能性があるの
ですか。どこまで話を信じたらいいのか分からないのが困り物です
ね。

一人でいる3時間は長いが、二人で話す3時間は短い。3人ならも
っと短かったんだけど。

・・・さて、すぐろくでいうならスタートに戻るといったところか
な。

まさか最初のサイコロで2ぐらいを出したらいきなりスタートに戻
るがあるとは思わなかった。

今度はお屋敷へ。さて鬼が出るか。蛇が出るか。もしかしたらファ
ンシーな猫・・・猫がいいな。

野口君は猫が好きだったな。猫耳をつけて今度会いにいつてみよう。

そんな事を考えていた3時間だった。

6話：緊縛？なにそれ美味しいの？（後書き）

6話終了。

皆様見て頂き有難うございます。

7話：どうなるこつなる？（前書き）

7話投稿完了。

日曜日は失礼致しました。

毎日投稿をするつもりでしたが、仕事が忙しく10人の方が見てくれたにも関わらず投稿できずでした。

火曜が休みのため火曜日に4話から3話投稿しようと思っています。

是非、変わらぬご愛読をよろしくお願いします。

・・・お気に入りか2件なのに後の8人はどこから来たのだろう・・・

・
最底辺ランキングとかで来てくれたのかな。

7話：どうなるこつなる？

「ミナミ、着替えて来い。」

縄を解いてくれますか？いつまでも担がれているのは少々。私も乙女ですよ？

「ああ、連れていってくれ。」

「はい。畏まりました。シユタイン様。」

メイドさんですね。本物は初めて見ました。メイド喫茶とは違ってスカートが長いんですね。

「では、失礼します。」

担がれました。力持ちなんですね……。荷物ですか。

「ミナミ様、失礼します。縄を外しますが、暴れないよう。私はこの館の侍女責任者をさせて頂いておりますマールと申します。」

マールさんですね。カタカナの名前は覚えづらいです。後、ここまで来て暴れはしません。

罪には問われないようですね。

「では、失礼します。」

脱がされました。下着もですか？出来れば一人で着替えたいのですが？

「勿論、駄目です。」

一蹴ですか。そうですね。

「こちらの、黒のドレスに着替えて頂きます。」

制服ではないのですか？何故？と聞いても答えてはくれないのですよ。

「ご明察、ありがとうございます。少々話を聞いていた方とは違うようですね。」

どんな話か気になる所ですが、まあいいです。

「化粧と髪に関しては・・・髪だけ櫛を通して頂きます。貴方のような若い方ですと化粧が無くても大丈夫でしょう。」
「ありがとうございます。1日森の中を歩いていたので髪がちょっと気になっていたので。」

「では、主の所へお連れいたします。」

主さんって人は何故私に会いたいのでしょうか？

「私共は主の命令に従うまでです。」

そうですか。そういうものなのですね。この命令人間。

「貴女も似たものでしょう。」

そうですね。良く分かりましたね。

「匂いで。」

犬か。

「主。お連れ致しました。」

連れられて来ました。

「ああ入ってくれ。」

エルさんもいるようだ。少しは安心。できません。アウエーど真ん中すぎて知った人がいるだけで安心出来てしまいそうです。

「ああ、ミナミそこに座ってくれ。」

はい。床ですか？それはちよつと・・・。

「違う！その椅子だ。」

はい。ソファーに座ればいいんですね。あっコーヒーが飲みたいです、マールさん。

「お前は自分の立場が分かっているのか？」

何かしらの利用価値があるのでしょうか？貴方の主様にとって最大限

の利用価値が私にある。それだけ分かっていたら十分でしょう。

「ふん。ミナミ、お前は人に嫌われるだろう。馬鹿の振りをしているのにも関わらず、その馬鹿さが隠せていない。いや、違うか。隠していない。」

フフフ。乙女のお秘密ですよ。エルさん内緒にしておいてくださいね。
「もういい……。お前の相手をし」

「お前、ミナミ・クサカといったか？」

主さん、エルさんの言葉最後まで言わせてあげて下さい。
はい、と肯定の返事を返す。

銀髪が良く似合ってる。エルさんよりも少し年上30歳ぐらいといった所か。

「お前、俺の娘になれ。」

……。もう一度よろしいですか？

「ミナミ・クサカ、俺の娘になれといったんだ。」

突拍子も無い人ですね。エルさん？貴方の主は説明も無しに養子を取る方なのですか？

「ああ……。ミナミ。主は……」

「ふむ、俺の養子になればとりあえず美味しい物は食えるぞ。後、欲しいものがあればなんでもやろう。」

そうではなく……。もういいです。理由が聞きたいのですが？それに加えて私は18歳。貴方の娘には少し大きすぎるのでは？

「嘘だろ！？12・3歳にしか見えないぞ！」
うるさい。

「そうか、理由か……。簡単にいうと政略結婚だな。」

簡単すぎます。もう少し……。ん？政略結婚？

「ああ、お前も分かっているだろう？カツヤ・ノグチという勇者が

誕生したのを。」

ええまあ。野口君ですからね。

「今回の勇者は若く、猛々しい男だと聞いた。それに加えて珍しい黒髪というのをな。」

猛々しい・・・ヘタレではなく。猛々しい。野口君には似合わない形容詞ですね。

「俺の家に紛れ込んだ黒髪の顔も悪くない女がいると聞いてな。カツヤ・ノグチの後妻にでも入れればと幸い。最悪、後宮にでも入れれば俺としては満足なんだがな。」

・・・ふむ。そういう事ですか。野口君、ハーレムを作る気ですか？異世界だからといっていい気になっていませんか？調子にのっていると天罰が起きますよ。例えばパンを食べると全てワサビとカラシが入っているかもしれませんから気をつけて下さい。

「理由はこんなもんだろう？俺の娘として王都へ行き。カツヤ・ノグチを落とす。そのドレスも似合っているしな。思っていたよりも良い所のお嬢様には見えるぞ。」

話を聞いていなかった。なんだろう？お礼を言っておこう。ありがとうございます。

「ああ、良いのか。思ったよりも物分りがいいのだな。では、私の名前はトラビア・シュタイン。このシュタイン家の主をやっている。」

・・・？エルさん？なんで警備なんてしているんですか？

「ああ。長男は対外的なこと。次男は家の事をする。それがこの家なんだ。」

夫婦みたいですね。トラビア×エル萌え？

「意味は分からないが、否定をしておこう。」

「ミナミ・クサカ。お前はこれから”ミナミ・シュタイン”と名乗

って王都へ行ってもらう。」

あれ・・・？何故かOKしたことになってる？・・・まあいいか。
野口君と早く会えるというのなら、何の問題もない。

「2週間後、王都へ向かってもらう。」

長い。明日でもいいですよ？というか明日にしてもらえませんか？
「勇者に好かれる自信がよっぽどあるのか？マールに仕込んでもらうつもりだったのだが。」

ええ。あります。私と野口君は赤い糸で結ばれていますから。

この国のいるかは分かりませんがお姫様にも負ける訳がありません。
「はっはっは！絶対に無理だな！ノーラ姫と勇者は、かなり親密だと聞いている！今からお前が行ったとて絶対に無理だろう！」

ピキッと音が鳴った気がします。顔が引きつりそうです。いや、引きつっているのでしょうか。エルさんもトラビアさんも顔が引いています。ドン引きというやつですね。

トラビアさんに明日で結構ですと言い。今日はマールさんに勉強を教わっておきますね。

では失礼しました。あっいえ、”お義父様”、失礼致しました。では明日。

「う、うむ分かった。マール、今日はミナミの世話をしてくれ。」

野口君。会う時が楽しみです。フフフフフフフフ。

7話…どうなるようになる？（後書き）

6話終了。

野口君死亡フラグがたっ てきております。
はてさてどうなることやら。

8話：説明回。（前書き）

8話説明回。

ちよつとしたことの説明ですね。

20時ぐらいにもう1話いきます。

8話：説明回。

「では、ミナミ様。このドレスは夜会で使用するため、また着替えで頂けますか？」

制服に着替えてもいいですか？いいですよね？

「ええ、勿論。今日1日私とずっと一緒ですからね。逃げられるという事も無いでしょう。」

信用されてませんね。

「勿論でございます。」

即答ですね。

「勿論でございます。」

この・・・メイドー！

「メイドではなく侍女です。」

そうですか。

「勉強といつても、何をでしょうか？私に答えられる事など少ないと思いますか？」

常識を教えてください。

「ミナミ様に常識を教えることは不可能でございます。」

な、なんだって！ああ・・・私がすごい常識人すぎて教えることがないと。

「いえ、教えてもしないと分かってる人に教える意味がありません。」

そうですか。

「夜会の作法等は知っていますか？」

一緒について来て。

「主の命令がありましたら。」
お義父様とか呼んだら大丈夫では……いやないか。そんなのは小説の中の親馬鹿だけだ。

王都まではどれぐらいかかるの？

「馬車で5日ほど」

……全部で1週間……か。4日以上野口君の顔を見なかった日はここ10年以上無かったから、私がどうなるのか想像もつかないな。

モンスターって何？

「動物に近いものですね。王都から遠ければ遠い程多くのモンスターが出るそうです。大体が普通の動物よりも倍。2倍と大きい動物をモンスターと呼びます。」

という事は、あの猪もモンスターと……大きいわけだ。

「稀に人型というモンスターもいますが、私は生まれて1回も見た時はありません。聞いた話ですと、人と見た目がまったく変わらず、体のどこかに刺青があるとの事です。」

それは、倒すの大変そうだ。人なのかモンスターなのか分からないじゃないか。

「ええ。ですので、専門の人達が王都周辺にはいるそうですよ。」
ふむ。専門の人……達ねえ。

火を放つ魔法というのは強いのか？

「火を放つ？いえ、火を手から放つことは出来ません。」

え？

「剣を持ち。剣に火を纏わせる。弓矢の矢を火で纏わせて打つなど

は出来ますが。」

・・・そうですか。では、私の見間違いですね。先ほど村で火を放つてる人が見えたので弓矢と勘違いしたのでしょうか。

・・・後で考察。

食事マナー。ドレスでの歩き方。淑女らしい話し方。とりあえず簡単に行っていく。出来なければ、5日の間に何とかしよう。

1日なんてものはすぐに過ぎ去ってしまう。

夜になり、食事の時間だ。

エルさんとトラビアさんと一緒にだ。マールさんも隣に立っている。

・・・二人共貴族なんだと実感。

私もフォークナイフは使えるが、あそこまでの優雅さはないかな。

「どうした。ミナミ。」

いえいえ、食べていてください。

「食べづらいから聞いたんだが？」

慣れてください。

「お前の視線には一生慣れそうにもないよ。」

慣れなくても結構です。

「どっちだよ！！」

うるさい。

トラビアさんは・・・と思つてると。

「ミナミ・クサカ。」

フルネームですか。

「明日の朝、馬車がくる。起きたら荷物を持ち下の広間に来い。」
起こしてください。

私はこれでも朝がすごい弱いんです。

「当然だ。庭で一晩中寝ていられる奴の起きれるなぞ信用するに値しない。」

硬かったです。

胸が痛くなりそうでした。

「ふんっ」

一蹴ですか。鼻で笑われましたよ。

何も言われないのもそれはそれで嫌なのですが。

「マール。ミナミを湯浴みさせて今日は寝かせる。明日に支障がないようにな。」

「はい、かしこまりました。」

一人で入りたいというのは駄目なのですね。

「勿論です。」

即答ですね。

「勿論です。」

笑顔がまぶしいっ。

あのすいません。マールさん。後ろだけでいいです。前はいいです。髪は嬉しいですが、前はいいです。

「自分で洗うと洗っていない位置がでてきます。ミナミ様は気にせず。」

気にします。

「・・・」

無視ですか。あの、本当に！前はいいですから！

「・・・」

あの、ちょっと！

「・・・」

野口君。私は汚れてしまったよ。私はもうお嫁にいけない。野口君にきちんと責任をとってもらおう。そうしよう。うん。・・・寝よう。忘れよう。

「お休みなさいませ。ミナミ様。」

貴女の顔を見るたびに忘れたい事を思い出しそうですね。

王都には絶対についてこないでください。

「忘れていました。ミナミ様。主命により、私もミナミ様に同行することになりました。短いとおもいますが、よろしく願いいたします。」

・・・久々に自分自身を呪いたくなりますね。マールさんの鉄面皮！

「ええ侍女ですから。ではお休みなさいませ。」

・・・こちらへ来てから私のペースが崩れている気がする・・・。

これもそれもあれもどれも野口君のせいだな。

・・・早く会いたいな。

8話：説明回。（後書き）

ではでは第8話終了させていただきます。
読んで頂きありがとうございました。

9話：RPG風な異世界（前書き）

話がすみませんね。

毎話2000〜3000文字程度でまったりやっていきます。

本日も見て頂き、ありがとうございます。
では続きをどうぞ。

9 話：RPG 風な異世界

「ミナミ様。 ミナミ様。」

後5分。

「ミナミ様。 起きてください。」

後4分30秒…

「起きないと、どうなるか分かりますね。」

起きます起きます。

マールさんおはようございます。 今日良い… 天気かどうかは分かりませんね。

真っ暗です。 寝ますね。 おやすみなさい。

「起きろ。」

頭を叩かれたのは久々だ。 少し懐かしい空気に顔が笑っているのが分かる。

「どうしたのですか？ ミナミ様？ お顔が余計におかしくなっておりますよ？ 叩かれて喜ぶ性癖でもあるのですか？」

うるさい。 マールさんはいつも通りですね。

後、叩くほうがいいです。

「では、着替えて下へ降りて来て下さい。 朝食は馬車の中で軽く済ますそうですので、お早めに。」

制服へ着替える。 なんだろう。 たった2日なのに学生というのを忘れてしまいそうだ。

これから5日間も馬車の中で生活か。 歩くよりはましとはいえ、少し憂鬱だ。

早く自宅に帰って自分のベットで寝たいものだ。

そういえば学校は、どうなっているのだろう？ 絢子さんは、心配してるのだろうな。

フフフ。野口君と異世界で旅をしていた。と言ったら絢子さんはどんな顔をするだろうな。

今から帰った時が楽しみだ。

「来たか。いくぞ。」

おはようございます。お義父様。とてつもなく怪しい響きですね。

お義父様というよりも愛人とかのほうがしっくりきそうなのですが。

「俺としては、そちらでもいいのだが？」

お断りしておきます。

馬車が揺れる。

暇です。

トラビアさんは、無口なというか書類を見えていますね。

マールさんは・・・上手な手綱捌きですこと。

「ミナミ。」

なんですか？

「お前は、どこから来た？」

説明しがたいですね。日本とって分かりますか？

「場所は知らん。だが名前は知っているぞ。」

そうなのですか。これは意外です。もしかして、ここは地球・・・
いえいえ火のことを忘れていました。

「前回の勇者が最初に発した言葉がそれだったからな。」

「ここは日本か？日本に帰せ。そんなところでしょ。」

「ほお、よく分かったじゃないか。」

「私も言いたいですから。」

「ふん。だが、前回の勇者はモンスターに殺され、それ以降音沙汰もなくなっただけだ。」

「ふむ勇者でも負けることがあるんですね。」

「ああ、前回の勇者は俺でも殺せそうだったからな。」

「怖いことをいいますね。その勇者はよっぽど弱そうに見えたのでしょう。」

「今回の勇者は皆の期待が強いはずだ。若く。遅く。そして何より強い。」

「ん？前回の勇者は若くなかったのですか？」

「ああ、私が20歳。10年前だな。その勇者は62歳だと言っていたな。」

「・・・それは無理でしょう。この国も少しは頭を働かせるべきだと思いますよ。」

「だが、この国には300までも生きる見た目若者もいるからな。」

「そうなのですか。そんな人がいるならば62歳は若い人なのかもしれませんね。」

「つてないですよ。私何を納得しようとしてるのですか？300歳です。」

「ああ、そんな奴は一人しかいないから安心しろ。」

「そうですか。何人もいたら不気味ですよ。」

「そいつは、時を操る事が出来るらしいな。だから何年時間が動くと見た目はそのままである。と俺は聞いた。」

「会った時はないのですか？」

「無いな。放浪癖があり、気に入った者にしか近づかない。この国でも会った事があるのは数人だろう。」

その後、数時間話をした。

ふう・・・ありがとうございます。

私の暇つぶしに付き合ってくれて。”お義父様”

「ふん。暇だから付き合えと顔に書いてあったではないか。ミナミ。お前は顔に出やすいのだな。」

わざとですよ。

「ふん。そうか。ならいい。王都にいったらそのような顔を見せのではないぞ。」

分かっていますよ。

・・・ふむ。情報が揃って来たという感じはしますね。

”時”。これが帰るキーワードという所ですか。

RPG風な世界。私の目標は野口君と一緒に帰る。

やはり帰れる可能性は高そうですね。

後は・・・野口君のほうをなんとかして、一刻も早く帰ることにしましょう。

夢なんてものは、当たらない方がいいのだから。

9 話：RPG 風な異世界（後書き）

見て頂きありがとうございました。

まあ 5 分で見終わるぐらいの量なので、他の面白い小説までの場繋ぎにでも使ってください。

では。

10話：回想という名の妄想2（前書き）

まずは、クリックありがとうございます。

お気に入りが3件になっていました。

評価を付けて頂きありがとうございます。

評価が付いて居ない作品も沢山山のようにある中、点数を付けて頂けるこの作品は幸せ者なのでしょう。

後、昨日のPVが異常でした。

この4日間のPV数と昨日1日のPV数がほぼ同数。
どうなっているんだ・・・。

では回想回2回目。

10話：回想という名の妄想2

荷物を背に当て、揺れている馬車に身を任せる。

これが一番疲れないですね。

出来れば柔らかいクッションが欲しいですが、お義父様も布を置くだけの所を見るとクッションは無さそうですね。

・・・甘いものが食べたいですね。3日目、毎日考え事するのは・・・疲れます。何も考えないというのも良いのですが、確実に悪い方向へ行く予感がします。

「なんだ、その顔は？」

お義父様。甘いものはありますか？

「甘いもの？王都へ行けば食べれるぞ。」

そうですね。甘いものはあるんですね。それは楽しみです。

「何が食べたいのだ？」

ケーキですね。チョコレートのを希望します。

「けーき？ちよこれーと？それはなんだ？」

ケーキとチョコもないのですか。この世界の甘いものとはなんなのでしょうか。砂糖はあるのでしょうか・・・。

「砂糖はあるが、あれは調味料だろう？」

これは困りました。砂糖があるのにデザートはないのですか。この国の料理人は研究熱心ではないのですね。

「ふん。果物でも買って欲しいのかと思っただわ。」

果物が甘いものに分類されるのですか。先日の食事にはパンがありましたからケーキぐらいは作れそうな気がしますね。ああ卵があればクッキーでもいいですね。

そういえば、野口君は甘いものが苦手だったね。小さい時はあれだけ好きだったのに。

甘くないバレンタインチョコや、クッキーなりを作るのは大変だった。

最近はずいチョコもあつたので楽にはなつた。昔、塩入りチョコとタバスコ入りチョコを食べた時は、すごい顔をしていただけね。

その年のホワイトデーはワサビ飴をもらった。野口君仕返しは良く無いと思うよ。

わざとだけだね。

「南！チョコくれチョコ！」

野口君？君は何をいつているのかな？チョコレートは私の栄養源だよ？それを奪うというのかい？

君はなんて残酷なんだ。君にあげるチョコレートは無いよ。

「そんなの初めて聞いたわ。お前コーヒーとか好きなのに甘いものも好きだよな？」

それにはまったく関連性がないね。甘いものを食べるからこそ、苦いものが美味しいのじゃないか。

で、何故チョコレートを私から奪おうとしたのだい？

「ああ明日バレンタインだろ？中学の奴らが何個もらったかで勝負とか言い出してな。俺だけ1個も無いんじゃない？」

ふむ、それは可哀想だね。

「そうだろ？そうだろ？だからくれよ。」

ご愁傷様。1個ももらえなかった野口君。

「まだバレンタインは始まってないねえよ！しょうがねーか。まあ明日下駄箱とかに入ってるかもしれないしな。」

そうだね。もしかしたら入っているかもしれないよ？

「南！！見てくれ！今朝学校に行ったら下駄箱にチョコが入ってたんだよ！漫画みたいな事本当にあるんだな！いやー俺も、もてるようになったな！なんとか勝負にも勝ったしな。あいつら全員学校にいる間にチョコ貰えてなかったしな！」

うるさい。良かったじゃないか野口君。どうだい？早速1個食べてみては？

「そうだな。誰がくれたかわかんねーけど5個ぐらい入ってるしな。南も1個食べるか？」

いや、私は遠慮しておくよ。

「遠慮しないでいいぞ？お前の栄養源なんだろう？」

いや、その子が頑張って作ったチョコレートなのだろう。野口君が食べるべきだね。

「ああーそういうもんか。じゃあ1個。」

野口君の顔が真っ赤になった。トマトみたいだな。

「かれえ！超かれえ！ウルトラかれえ！なんだこれ！いたずらか！？」

野口君に水を手渡す。

ああ、それはタバスコチョコだね。野口君は確か甘いものが苦手だったはずだろう？頑張ったのだよ？

「……ん？南！！てめえ！何しやがる本気で息がとまっただろうが！」

頑張ったのだよ……？

「う……だまされねーぞ！はぁ……初めて貰ったチョコがこれかよ……」

では2番目も私だな。

「ん？何が2番目だった？」

「南！よお！」

うるさい。どうしたんだい？野口君？

「いやー今日ホワイトデーだろ？これ南のために買ってきたんだよ。」

「ああ今日はホワイトデーだったのかい？飴？ありがたく貰っておくよ。」

「いやー選ぶの苦労したぜ。えらいファンシーな店まで行って入れ物探したりするの大変だったんだぜ？」

「そうなのかい？そこまでしてくれるとは思わなかったな。ありがとう野口君。」

「い、いやいいんだ。飴程度でそんなに喜んでくれるとは思わなかったがな……。」

「こつというのは気持ちだよ。野口君。で、なんで目が泳いでいるのかな？」

「いやあーうんうん飴を早く食べて欲しくて走ってきたからな！」
「関係無い気はするがね。」

「では好意に甘えて。うん。この辛さわさびだnゲホツ……。」

「野口君？君は女の子にワサビを食べさせて喜ぶ嗜虐趣味でもあるのかな？」

「へっへー！！バレンタインのお返しだよ！」

「そうかい？来年を楽しみに待っているんだね。野口君。精々来年までの1年間背中に気をつけることだ。夜は出歩けないと思ったほうがいいね。」

「怖っ！なんだその台詞。すげー怖いじゃねーか！」

「ふん。少し楽しみだったのだから。」

「ほら。」

「頭に何か置かれる。」

「動けないのだから？」

「まあまたな！」

「タバスコも食べてないのに真っ赤だよ野口君。」

チリンと鳴る片方だけの小さなリングイヤリング。中学生の買える物だ。高いものどころかチープなものだろう。

ずっと付けていたな。当たり前のように付けていると外すのを忘れてしまうな。たまにつけたままお風呂にも入ってしまうしな。

「何を笑っているのだ？」

ええ昔のことを思い出していたのですよ。

「ふん。その顔でずっといられるのなら世界中の男を虜に出来るかもしれんな。」

無理ですね。

この顔は野口君と一緒にの時にしかできませんよ。

10話：回想という名の妄想2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

では、今日はお休みのため3話はUP予定です。

時間は起きたら書き出しますので、昼過ぎと夜に掛けてかと思えます。

では11話でお会いしましょう。

11話・つなぎすーぶ。（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

11話UP完了です。

眠いです。

けど面白いですね。物を作るというのは。

後、皆様のお勧め小説などが知りたいですね。

感想は書かなくていいのですが、まあ書いてくれると嬉しいですが、お勧め小説。これはというのがあったら感想の所にでも書いて頂けると嬉しいです。

では、皆様方11話をどうぞ。

11話：うさぎすーぶ。

森を抜けた。

マールさん。お疲れ様です。私も変わってあげられたいんですけどね。

「ミナミ様ありがとうございます。お気になさらず。」

広い。一面の大地だ。日本に居た時にこれだけの平地は見た時がなかったな。

どんなに綺麗な農地でも遠くにはビル郡があつたり家があつたりするからね。

「ミナミ様の住んでいた日本という国は、栄えていたんですね。」

栄えすぎて廃れてきていたと思うがね。建物の中で農作物を育て始めてきていたのには少々気が触れたと思ったよ。

「外で作ればいいのに、建物の中で作るのですか？」

近場の外では農作物が作れる土地がないのだよ。

「それはそれは。その国は近い内にいずれか滅びるでしょう。あるがまま。ありのまま。それが出来なくなつた時に国は滅びます。」

だろうね。栄枯盛衰。国はいずれか滅び。そして新しい国が出来る。それがいいのではないか。

時代の節目に生きているというのは寂しいが、それもまた面白いだろう？

「それはそれで楽しいのでしょうね。」

まあ、この国もいずれか滅びるだろう？外部の人間を呼び。国を守ってもらふようでは。

「どうなのでしょう。ですが勇者がいなくても、モンスターなどは国の騎士達で倒せているようですけどね。」

・・・では、なぜ勇者を呼ぶ必要がある・・・？

「数十年にたった1度厄災が起きるのです。その時に勇者の力が必

要なのです。騎士団では手も足もせず、国が壊滅するか。勇者に倒されるか。」

厄災ね。魔王といった所か。これを倒せば帰れるのか？・・・なんとなくだが違う気がするな。いや、倒さないといけないのだろう。ここでこの話が出るということ・・・

眩暈がした。倒れそうだ。

「どうしたのですか？ミナミ様？顔が真っ青ですよ？」

ああいや、大丈夫だ。手を振る。

「南！楽しいな！お前とこうしていられるのは！」

「ふん！野口君！私は君とこんなことはしたくはない！早くその剣を下ろせ！」

・・・最初の夢の前か？なんだ今の会話は寒気がした。何故だろう。

野口君。少し君に会ったのが怖くなった気がするよ。

いやないな。私が野口君を怖がるだと？あり得ない。

「ミナミ様。少し横になられては？顔が真っ青すぎて見ていられません。」

ああ、マールさんありがとう。

「ミナミ。どうした？そんな顔をして。」

いえ大丈夫です。横にならせて頂きます。

「ならいい。少し横になっっている。おいマール馬車を少しの間止めておけ。俺はこれから猟に行く。」

「はい主様。こちらはお任せ下さい。」

2〜3時間は寝ただろうか。

「あ、ミナミ様起きましたね。顔色も戻ったようで安心しました。」
挨拶をして水をもらう。喉が渴きました。

「こちらを食べて下さい。ウサギ肉と山菜が入ったスープです。」

・・・ありがとうございます。マールさん、それとお義父様。

「いえいえ、私は料理をただけです。御礼ならば主のほうへ。」
寝ているのですが。

「久々の猟で疲れたといっていましたよ。最近は猟など全くしませんでしたからね。」

ふふっ貴方もツンデレでしたか。獣臭いスープだ。私が今まで食べてきたものの中でも不味い方に入る。けど暖かいな。それで十分だ。
「そう言って頂けると助かります。肉というのは熟成させたほうが美味しいですからね。」

野生の獣なのだから当然だろう。

「ミナミ。体調管理はきちんとしろ。お前は商品なのだ。そのような顔は商品価値を下げる。」

はい。ありがとうございます。お義父様。というか起きていたのですね。

「ふん。俺は寝る。2日後には到着する。精々自分を磨くのだな。」
そうですね。そうなのでしょう。

後2日。野口君、君はこの1週間何をしていたのかな。

私は結構な苦勞をしている気がするよ。

君に会ったら何から話そうか。話すことが沢山ありすぎて、何から話そうか迷ってしまうよ。

夜会に行く前にクッキーでも焼かせてもらおう。どこかのキッチンを借りれるだろうか。

この国の人達に配って。トラビアさんにもマールさんにもエルさんにもあげよう。

たった4日。縛られたりしたが、私一人だったのならば食事にも困っただろう。

野口君。君もきちんともらった恩は返すんだよ。もらうばかりでは人間関係というのは成り立たないからね。いずれか大きなもので返さなくてはいけなくなる。そうなってからでは遅いのだよ。

思わず笑ってしまった。高校に入ってから私は私が心配する事はなくなり、いつも私が心配されていたのにな。小学生の時に戻ったようだ。

・・・これはこれで悪くない。そう思えた。

11話：うさぎすーぷ。（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

ウサギ肉は食べた時はないですね。

ジンギスカンは匂いがきついですが美味しいのですから。

ウサギもそこそこ美味しいのでしょうか・・・

今日中に12話は投稿予定です。

12話：幸せはどこにある。（前書き）

クリックありがとうございます。

お気に入りかいつの間にか4件になっていました。

次は5件を目指して頑張ろうと思います。

では第12話どうぞ。

12話：幸せはどこにある。

壁が見えた。なんだろうあの壁は。

「ああ、見えて来ました。主、起きて頂けますか？門を通ります。」

「そうか。もうそこまで来たのか。」

門？あれは壁だろう・・・。

「あれはモンスター対策ですね。後は犯罪者を王都へ近づけさせない為の門です。」

真横に遠くまで伸びる壁。ベルリンの壁というのもこのぐらいなのか気になる所だな。

まあ日本には無いものだろう。万里の長城にも匹敵するのではないだろうか。

「通行証を見せてもらう。」

門番か。あの大きな壁を抜けたら王都か。門を抜けたらどんな街並みなのかは楽しみだな。

ビル郡ではないのだろう。いや。ビル郡だったらビル郡で面白いな。違和感がないが。

「ほら。」

眼科検診？あかんべーの舌を出していない状態？何をしているのだろう？通行証というのはカードではないのか？

「ああミナミ様。カードもあります。こちらに。」

そうなのか。カードだけではないと。

「ええ。皇王に近い者は目に紋章を宿します。」
痛そうだな。

「いえ、痛くないそうです。生まれた瞬間に可能性がある人は全て、専門家に紋章を入れていただけるそうですよ。逆にいうとその紋章が無ければお城には入れないという事になります。」

ん？マールさんは城にはいけないのか？

「いえ身の回りの世話をする従者は数人、十数人でしょうか。それぐらいならば入れます。主一人でなど絶対の安全があるうともあり得ません。」

何かあつた場合は命をかけて守ると。

「勿論です。」

良い笑顔です。

「そこのお前、目を見せてみる。」

私ですか？

「ああ、こいつは紋章を持っていない。つい先日、私の養子となつたのだ。」

「そうですか。では王都に入りましたら、紋章を付けて頂いて下さい。お戻りになる時に紋章が無い場合はその方だけ通せない可能性もあります。」

「ああ、分かっている。」

銀貨らしいものを渡していますね。チップか私達が通ったことを秘密にする口止め料というところでしょうか。まあ前者でしょう。

「ミナミ。お前に紋章はつける気はない。」

そうですね。

「ああお前が勇者に気に入られなければ。そのまま放り出すだけだ。ああ最悪俺の妾にでもなつてもらうか。」

いえ、結構です。始めてが、お義父様というのは少々。

「ふん、まあ気に入られれば、王都にいることになる。紋章の意味がないからな。それよりも俺の紋章よりかは王族の紋章でも貰うといい。」

まあ、野口君ならば確実でしょう。

ですが、何かしらが原因で断られる可能性もあるでしょう。
野口君以外の人の思惑もありそうですね。

さて、門を通る、どんな街か。眩しいな。なんだろう。

一面の金色の畑か。通りで眩しい訳だ。小麦か？それにしてはすごい色のような気もする。

「すごいでしょう。初めて門を通った人は皆そのような顔をしています。」

ええ、ここまで見渡す限りの金色の畑は見た時がないですね。CGのようです。

「CGとは良く分かりませんが、これは王都に住む人達のための畑です。近くに集落もいくつかありますよ。」

・・・そういえば王都はどこに？

「ここから後1日も経たない内に到着しますよ。」
まだ1日もかかるのかい？遠いね。本当に遠い。

いつになったら野口君に会えるのかな。そろそろ本気で野口君栄養素が不足してきたよ。

そんなものは存在しないが。私の中には確かにあるのだろう。

お義父様をいじつても、駄目。

マールさんはいじる方。

これでは、発散ができないではないか。

「いじつてさしあげましょうか？湯浴みの最中でも布団の中でもよ

ろしいですよ？」

いえ、結構です。

「少しはいじれば、胸が大きくなるのでは？」

うるさい。そんなものは迷信だ。揉めば大きくなるのだっただら世の中の胸のほとんどは大きくなっているだろう。

「そうですね。大体脂肪の塊なのでですから揉めば小さくなりそうですね。」

うるさい。小さい時に試した私を馬鹿にしているのか。そんなにトラウマに触れたいのか。

「ふふふ。ミナミ様。気にしない事です。殿方は胸の大きさは気にしませんよ。」

それはないね。男という人種は胸が大きければ大きい程目がいくものなのだ。

「それは目がいくだけでしょう？好きかどうかは別物ですよ。」
分かっているがね。

分かっているが、あまり分かりたくはないね。

「そうですね。私達は見られる側。殿方は見る側。見る側の意見など、どうでも良いことです。」

私は見るけどな。

「そうですね。では、私が見てさしあげましょうか。」

結構。

「そうですね、残念です。」

・・・野口君。女の魅力は、胸だけではないよな・・・？

愛嬌とか。私にはないな。

笑顔とか。普段は無表情に近いな私は。

・・・この女らしい髪だけで許してくれ。

12話：幸せはどこにある。（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

そろそろ王都へ到着。

11/2からは1日2話の予定でいきます。

日曜日と祝日はどうするかな。と考え中。

最低でも1話はあげますので、よろしくお願いします。

13話：料理回またはお菓子回（前書き）

朝投稿するつもりでしたがエラーにより投稿出来ませんでした。
読んでいただける多くの方に謝礼を。

読んでいただけて初めて小説は完成ですからね。

では13話をどうぞ。

13話：料理回またはお菓子回

・・・門の中に門がある。シールだな。

どこかで、こんな家を見た時があったな。ああ・・・あの万年休載漫画の話だったか。

野口君はあれが好きだったな。

小学生から見るといつていたが、未だに買い続けているのだろうか。

手続きは終わったようですね。

「ミナミ様。本日はもう暗くなりましたので、王都の家へ向かいます。」

そうですね。

「明日は週に1度の皇国の休祭日となるので明日買い物をし、明後日入城予定です。」

野口君と会えるのが遅くなるな。勉強もそろそろしないと危ない気がするな。

帰ったら、遅れを取り戻さないとね。

「ミナミ。食べたいものはあるか？」

いえ、特には。ああそういえばクッキーを作りたいですね。

小麦粉・・・いえパンの粉と砂糖、バター、牛乳、卵当たりでいいですか。通じますか？

「失礼な。ギユウニユウとは何かわからんが山羊の乳でもいいのだから？」

牛がいないのですか。それとも乳牛がいないのでしょうかね。

「牛はいる。だがあれは肉用だ。」

そうですね。それでもいいです。

ん？バターはあるのですか？

「発酵させたものだろう？先代の勇者が死ぬ間にチーズとバターを作っていたからな。」

・・・そういえばこの国のアルコール・・・お酒の一般的なのは？

「ワインだな。」

そういう事ですか。それはチーズがほしくなるでしょうね。

「ミナミ、酒が飲みたいのか？いいぞ。俺の分も買っていくからな。ついでみたいなものだ。」

未成年です。

「ミセイネンとはなんだ？」

こういう所では不便ですね。異世界。

「酒を飲むのに、年など関係ない。飲める奴は飲む。飲めない奴は皇王の護衛になれないだけだ。」

警備的なものですか。

「そうだ。飲まねばいけない場面もある。その時に酔っていたのはどうしようもないからな。」

飲まなければと思いますが、それでも飲まなければいけない事もあるからでしょう。

活気に満ちてる。幸せそうだ。

皆笑っているな。

「それはそうだろう。勇者が現れたばかりに加え、その勇者は強いときたものだ。この街の安全は保障されているようなものだからな。」

そうかも・・・しれませんがね。

安全というだけで、この活気。日本も見習わないと駄目でしょうね。

「ミナミ様、こちらでよろしいですか？」

ああ・・・バターと牛乳。いや、山羊乳でしたね。大丈夫です。

「ミナミ。赤と白と青と黄があるがどれにする？俺の分はもう買ったが。」

いえお酒は。・・・なんといいましたか？青？本当に青です。真っ青ではなく緑色が混じった青です。

ブルーハワイですか。

黄色はレモンか何かで作ったワインですか・・・？

黄色はまだいいですが、青は自然の食べ物の色とは思えません。

両方とも力キ氷にかかっていそうです。

「赤は渋味 白は甘味 青は苦味 黄は酸味が強いな。」

青汁みたいです。ゴージャカ何かで作ったワインでしょうか。それは苦そうです。

「お勧めは赤だが青も美味いぞ。」

では、青色と黄色で。

日本では一生飲める事は無さそうです。

「お帰りなさいませ！主様！」

うるさい。それはそうだろう。20人はいる人達が同時に喋ればうるさい。

「お帰りなさいませ。トラビア様。おや？その方は？」

「俺の養子だ。ミナミだ。」

「そうですか。ミナミ様。私、この館の執事長を務めます。ルックと申します。」

ルックさんですね。覚えました。

「ルック。このワインを今日の飯に出せ。」

「畏まりました。マール、そちらの袋は？」

「こちらの袋はミナミ様のものです。厨房にでも置いて下さい。後

でミナミ様が調理をするようなので、手伝いは一人でよろしいですか？ミナミ様。」

私一人でいいですよ。

「では、一人付けてあげてください。」

無視ですか。

「ミナミ様は料理が出来るのですか。それは楽しみです。何を作ってくれるのか。」

たいしたものではないですよ。

「ミナミ。クッキーとやらは飯になるか？」

なりません。お菓子といっても分からないか。果物みたいなものですよ。

「そうか。なら作ってこい。最後に食べてやろう。」

偉そうですね。ああ偉かったんですね。忘れてました。

お金を出示してもらっているのですから、しょうがないですね。ルックさん。

「こちらです。ミナミ様。」

大きいですね。テレビで見たホテルの厨房並ですね。

「では、私がお手伝いいたしましょう。」

ルックさん？貴方執事で一番偉い人では？お義父様の相手をしなくていいのですか？

「マールがいますので。」

そうですか。

「ミナミ様は料理が上手なのですね。そこまで手際が良い貴族の方は私は見た時がありません。」

私は貴族ではないですしね。

「後はこれを焼けば？」

ええ180度・・・火加減出来るのだろうか・・・竈・・・直火に等しいですね。

ピザとか焼いたら美味しそうです。

何度か回転させて上手く調整しましょうか。

「ピザとはなんでしょうか？それもミナミ様の国の料理ですか？」
厳密には違いますね。

「良い色ですね。」

ちょうど良く出来たようです。

ルックさん食べて見ますか？

「よろしいのですか？では、一つ頂きますね。」

美味しく出来た。100個ぐらい作れば夜会の人全員に配れるか。

「甘く、サクサクとしていますね。このようなものは初めて食べました。」

美味しいですか？

「ええ勿論。主も喜ぶでしょう。」

いえ、野口君に喜んで欲しいのですけどね。

「ミナミ。ご苦労だった。」

偉そうですね。

「偉いんだ。」

そうでした。

「グラスを出せ。注いでやろう。」

ルックさんとマールさんの目が見開いていますよ。

「そうだろう。俺自ら酒を注いでやるなど初めてのことだ。」

それは・・・光栄ですね。

「ふむ、思ったよりは・・・ミナミ。お前は料理が上手いな。」
「どんなものが出てくると思ったのですか。」

「黒い消し炭が出てくると思っていたが。」

「そういうのは思っても言わないのが華ですよ。」

「お前にだけだ。」

「そうですか。」

「これなら夜会で配ったとしても、印象は悪くはなるまい。」
「それは良かったです。」

「100枚ぐらいでいいですか？」

「ん？それだけでは足りないな。」

「150枚？200枚ぐらいですか？」

「全然だな。1000枚はいるだろう。」

「マールさん。明日買い物に今日買った物を30個ずつと明日侍女の人達を7・8人貸してください。」

「・・・配るなんていうんじゃないか・・・」

「まあ・・・野口君も、この世界に来て1週間。食べ物には苦労しているだろう。」

「食べたければ3回まわってワンと言わせるのもいいかもしれないな。フフフ。」

「・・・本当にしそうだ。やめておこう。」

13話：料理回またはお菓子回（後書き）

13話終了です。

そろそろ野口君登場です。

南と野口君は二人で一人なところがあるので、ここまで大変でした。
では、また夜に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9645x/>

野口君観察日記。題名は変え・・・るのかな？。

2011年11月2日14時11分発行